

Re: ソードブレイブバースト

シヨン SXIYON

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

・ヴィウーチエ、それは現代における魔法：都会暮らしで探偵をしていて1ヶ月も学校に行っていないかつての英雄、『赤紙シヨン』エルノーヴァ魔法専門高校に入学する事になる。

※1 コラボ募集。

※2 コラボは募集しますが他作者や自分の作った作品とのコラボ以外は全部オリジナルです。（二次創作設定は念の為）

# 目次

|                   |    |
|-------------------|----|
| ・ドラグーンレットとラインズホース |    |
| ・その魔法使い、探偵。       | 1  |
| ・心は武術、外は魔法        | 8  |
| ・炎刀を纏いし天才。        | 18 |
| ・風纏う刀女            | 22 |
| ・霊々姉妹             | 32 |
| ・謎の吸収鬼と銃の使い手      | ペル |
| シャとミナミ            | 43 |
| ・完成する分離型特攻車両      | 50 |
| ・金の行く先は魔法!?       | 57 |



- ・ドラグーンレツドとラインズホース
- ・その魔法使い、探偵。

ヴィウーチエ、魔法や錬金術を得意とした魔法技（ウイザーディア）と剣、格闘技、槍を主に使う武術技（ストヴァン）

火、水、土、風しかなかった魔法は現代において様々な属性が現れるようになり、発展していった魔法技（ウイザーディア）そして拳法、剣術、銃の腕前等の自らが生み出し武器として扱う能力武術技。

大半は魔法技と武術技を主に使う者が多いがヴィウーチエの大半は女性が纏う。そして女性の人工が増え、『女尊男卑』の世界となるが…

その中で昔、唯一幼くして『魔法大戦』という大きな戦いを生き抜き、術をメインにして戦った少女がいた…：天才の頭脳と剣術を用いり、己と皆の為に戦った…

シャキン！ ジャキン！

??? 「こんなものなの？ 雑魚ね。」

戦争が終わった後、その少女は報酬金を貰い、去っていく。彼の居場所は…：まだ解っていない。周りからはこう言われた。

??? 「私の刀と炎には誰にも逃れない。」

『炎刀を纏いし天才』と。

そして……

シヨン 「ああ……もう朝か。」

俺の名前は赤紙シヨン。ただの探偵さ……と言ってもほぼニートだけどね。だからと言つて剣術の練習を怠つてる訳にはいかない。朝はまずトレーニング。そして次は俺の元に届いた簡単な依頼。そしてゲーム。

シヨン 「そろそろ学校に行かないとなあ……」

この町、秋葉原は魔法等を勉強する神田・エルノーヴァ魔法専門高校という……

シヨン 「相変わらずデカイなあ……あの学校は……」

東京ドーム5個分のデカイ学校がある……想像がつくだろうか。

ピンポーン

ああ……宅急便か？それとも依頼者か。仕方ない。

宅配員 「郵便です。はいどうぞ。」

シヨン 「ありがとうございます……重た。」

俺は怪しくその段ボールを開けると……

シヨン 「制服？と手紙だな。」

俺は渋々怪しくその封筒を開けると中には…

『背景：赤紙シヨン様。アナタを神田・エルノーヴァ魔法専門高校の生徒として任命します。』

シヨン「……」

え、今なんて…

『ちなみに、却下は出来ませんので♪ 理事長：黒ケ種愛娘』

シヨン「ウソだろおおおおおおおおおおお!?」

そして次の日…

「ジイー」

シヨン「あ、ああ…ああ…」

まあ…エルノーヴァ専門高校が女子校なのは知ってたけど…

シヨン「さすがにこうはならんだろ。」

カチナ「そうね…始めて女子校に入ったアナタにはちよつと苦痛かもね。」

シヨン「カチナ。」

俺の隣から声がのは未奈星カチナ…俺の幼なじみで代々継がれる未奈星家の令嬢…

ツンデレ気質の彼女の噂は学園中に広がっているらしい。

女子生徒1「ウソ、未奈星さんがあの男と幼なじみだなんて…」

女子生徒2 「フィエリーヴァさんが見たらどうなるのかしら…」

シヨン 「誰？」

カチナ 「1Bの学級委員よ…私のライバルでもあるの。」

愛娘 「では授業を始めます。今回は社会について。今回は紅蓮の英雄について話をします。」

カチナ 「シヨン…」

シヨン 「分かっている。」

愛娘先生の長い授業が終わり。俺はカチナと食堂に向かった。

カチナ 「でもまさかアナタが転校してくるなんて思いもよらずだったわ。でもなんで？」

シヨン 「共学になった件があるだろ？そのおかげで俺はこのざま。テストで入学させられたらしいよ。」

カチナ 「そんな単純なんだ（へっへっ、…）」

シヨン 「とにかく…学校に入学が出来た暇が潰せたし、ささつと授業を終わらせて…」

??? 「ちよつとお待ちなさい！」

俺が席を外そうとすると向こうから女性の声が…

??? 「ぬけぬけと委員会が怪しい行動を取っていると思ったら男子生徒を実装するなんて



…なんたる憎たらしき。」

シヨン「き、君は？」

ファイエ「ファイエリーヴアールウエリウオンですわ…ご存知ないんですの？」

シヨン「ウエリウオンって…確か中国とフランスの!？」

ファイエ「そう、私はフランスの母と中国の父の間で生まれたハーフですわ。」

シヨン「にしては日本語が上手い…」

ファイエ「まあ、幼い頃から生活が日本語でしたからね…フランスで住んでいた私は両親と日本に上京したんですの。」

シヨン「はあ…んで俺に何のよう？」

ファイエ「決まっていますわ、アナタ、こんな『雷撃を上手く使えない娘』と知り合いだなんて、なんて酷い話ですの？」

カチナ「アナタ…今私の事を雷撃を上手く使えない娘って!」

ファイエ「ああら、口が滑ってしまいましたね? まあ、事実ですからね?」

カチナ「コイツ…」

カチナは体全体に電撃を発生…彼女の特技、『獣電』だ。獣電は周囲の電気を自分の思うように使える特殊な能力だ。

紫野「はいはい、二人とも喧嘩はおしまい。」

ファイエ「紫野さん!？」

紫野「ファイエさん、言う前に一つ考えてから言いなさい。」

ファイエ「ですがこの人の家族は！」

紫野「真実がどうかは解らないわ：一旦、下がってちょうだい。1Aの素質を汚くしたくないの。」

ファイエ「ふん：：今回は多めに見ますわ。ですが、次は明日の決闘試合で勝負ですわ。（あんな女のどこが魅力的ですの。雷撃は周りを困惑するだけなのに。）」

そう言ってファイエウエリウオンは食堂から離れる。

シヨン「悪い、助かったよ。」

紫野「ごめんね、悪い空気を出したくなくてつい：：」

カチナ「紹介するわ、彼女は黒ケ種紫野、愛娘先生の妹なのよ。」

シヨン「赤紙シヨンだ、よろしく。」

紫野「よろしくねシヨン。」

シヨン「んで、さっきの話だけど決闘って：：」

紫野「ああ：：明日の決闘試合にカチナとファイエが戦うのよ：：でも最近ファイエが感情的になっちゃって。」

シヨン「そうなんだ：：んで、さっきカチナが雷撃を上手く使えないって：：」

カチナ「ああ…実は獣電には通常形態と獣電帯形態があるの…一定時間が経過すると獣電帯が発動するんだけど…」

紫野「使う代わりに狩浪（しゅろう）というモードが発動する…自我は保てるけど逆に怒りっぽくなるのよ。」

詳しく聞くと狩浪は狼が狩るような速さで攻撃してくる。その力を最近まではコントロール出来たみたいだが昔は…

紫野「多くの怪我人を出して…周りから嫌われる事になったの。先生達の大概は強く反発してないけど…一部の生徒と教師がカチナをいじめたの…勿論、すぐに教師は学校を止めさせられて、生徒は退学…でも未だに嫌な雰囲気を持たれるのよ。」

これで俺の目的が一つ増えた…カチナを勝たせる。絶対にフィエに圧倒的な力を見せる事だ。

## ・心は武術、外は魔法

シヨンだ。今俺はカチナと練習場で特訓をしている。

シヨン「くう！」

カチナ「おりゃ！」

シヨン「詰めが甘いぞ、そんなんじゃファイエには勝てないぞ！」

カチナ「うるさい！」

カチナは重たい一撃を俺に当てた。

シヨン「やるようになったんじゃねえか。腕は落ちてはいないが…冷静さが足りない。」

紫野「へえ…：以外と分かるのねアタタ。」

シヨン「魔法技が使えない分、武術技は能力で持つておかないとダメだろ？」

紫野「どうして魔法技が使えないの？」

シヨン「俺の母さんのところは魔法文化はないからな…」

でも問題はファイエという奴だ…：アイツは本気でカチナの事をバカにしてるのか？

紫野「浮かない顔ね…：もう17時だし…：夜ご飯一緒に食べない？」

カチナ「ああそうだと私お腹が空いてたんだく……」

シヨン「そーと、逃げ足、差し足、忍び足……」

俺はこつそり逃げようとするが……

カチナ「何を逃げてるの？（＾＾）」

シヨン「ヒイヒイヒイ!?!」

しまった、コイツ俺が練習が終わったからって逃げるとすぐ捕まえに来るんだった。

シヨン「禍物?」

カチナ「人に取り付いて怪異を行う化物よ……放っておいたら小さな事件を起こす可能性があるの。」

紫野「中には大規模な事件を起こした事例もあってね……その時の任務は大変だったわ。」

カチナ「そう言えばシヨンのお姉さんは一つ上なんだよね?」

シヨン「そうだな……姉ちゃんはいつも迷惑をかける奴だったよ。」

今もそうなんだけどな。

紫野「さあ、明日の試合、勝つわよカチナ。」

シヨン「え?」

カチナ「ああ言って無かったわね。明日の試合って2対2なのよ。」

シヨン「まさか俺？」

紫野「違うわ、もう一人いるのよ。ファイエと同じクラスのね。」

そしてその彼女の名前は：

カチナ「破輪とちね：私達のドラグーンレッドの中でも成績が一位の生徒で剣術の腕は相当強いわ。」

そして俺は家に帰って考え事をした。

シヨン「もしカチナが暴走した際に止められるのは俺だけだな。」

そして次の日、試合は始まった。

審判「これから破輪とちねとファイエリーヴァーウエリウオンと黒ケ種紫野と未奈星カ

チナの試合を始めます。各自、ギアを。」

とちね「特訓の成果は出たんだらうな？カチナ。」

カチナ「随分と慎重ね。」

とちね「無理そうなら私に言え。すぐに対処してやる。」

ファイエ「（ふん、こんな女。）」

俺は観客席で見ているが：

シヨン「どうもファイエの様子がおかしい…」

???「気づいた？」

シヨン「姉者、いや、乱花姉。」

乱花「ええ…今にも欲望が爆発しそうだわ。私が止めてもいいのよ？可愛い可愛いお姉ちゃんか。」

シヨン「乱花姉はちよつかい出さなくていいよ…無理そうだったら俺がカチナに声をかける。」

乱花「？」

審判「初め！」

ファイエ「いきますわよ！義法の一撃！」

カチナ「その攻撃はもう解ってるわ！」

ファイエ「な!？」

カチナとファイエの一騎討ちが始まった…一方。

とちね「腕は落ちてないだろうな？」

紫野「まさか…そんな訳ないじゃない。」

シヨン！

とちね「くっつ！」

紫野「そつちも腕が上手くなったじゃない。」

シヨン「うわあ…どつちもスゲー戦いだな…紫野…顔が怒ってる…後で殺されそう。」

紫野 「骨の髄まで怒ってあげてもいいのよシヨン？」

シヨン 「え。」

「…w」

乱花 「アツハハハハハハハハハハおつかしいw w wシヨンがそんな言われ方しててw w w」

シヨン 「／／／／／／／／／／」

カチナ 「アツハハハ…シヨン完全に心を詠まれてるわね…w」

カチナ油断して笑ってる間に…

ファイエ 「何を笑っていられるんですの？」

カチナ 「!？」

ファイエ 「よくも笑っていられますわね！欲望も無しにただ勉強して学んで！結局は自分の力をコントロール出来ない…そんなんだから私にも勝てないんですのよお！」

ドオーン！

とちね 「あれは!？」

紫野 「まさか禍物が!？」

とちね 「審判！試合は中止だ！」

ファイエ 「いいえ続けなさい！これが私のショーなのよおー！」

ドオーン！





フィエ「ほら！もつと暴れろ！自分の欲望を解き放つんだよ！」

紫野「待つて…フィエじゃない。」

とちね「どう見てもだな。」

カチナ「私はあ…私はあああああ！」

シヨン「カチナ…！…！…！」

「!?!」

カチナ「シヨン…？」

シヨン「過去を振り替えるな！恐怖を恐れるな！お前は何のために闘士になったんだ  
！」

カチナ「私は…」

シヨン「暴走がなんだ…虐められたからなんだ？そんなの関係ない！」

カチナ「!？」

シヨン「お前の魔法…拳…全部禍物に取り付かれたアイツに見せつけてやれ！」

カチナ「シヨン…！」

カチナが気合いを入れると空が曇っていく…そして…

ドォーン！

その空から落雷がカチナに落ち、彼女はパワーを溜める。

ファイエ(？)「ふん、ドーせ暴走するんでしょ？わかってるわそんなー」  
カチナ「すると思っただ？」

ファイエ「はあ!?!まさか!?!」

ドオーン!

ファイエ「ぎゃー!?!」

ファイエの体から何かが出ていき、ソイツは正体を現す。

紫野「やはりアナタなのね…小神望。」

望「お前らあ！なんで…なんで暴走しなかつたんだ!?!」

カチナ「予め力を押さえる力を手に入れたからよ。」

望「ふざけるな…私が…私の生徒が勝つ予定だったのに!?!」

シヨン「アンタの欲望は結構前に情報処理済みさ。」

望「なんだと!?!」

シヨン「禍物と化したアナタは自分の生徒が一位になるため、賭博をした…かなり大当たりだね。でもソイツ等も今頃に捕まってるさ。」

カチナ「私の獣電帯状態は自動的にいつでも発動が出来るの。暴走原因はスキルの処理能力が改善されなかったから。」

シヨン「獣電は元からあったLvがあつてね…俺は獣電を操れるように彼女のレベル

を上げるのを手伝ったのさ。」

望「ううう…忌々しい連中めえ！」

シヨン「ファイエはそうなの求めてない…彼女だって…自分だけの力を証明したかっただけさ。」

乱花『ねえシヨン？そろそろ出番くれないかしら？久しぶりに暴れたいんだけど？』

シヨン「ああ!?もう取り込み中に割り込んで来るなよ!？」

乱花『そんなの知らないわよ、ささつとほら。』

シヨン「仕方ない。」

俺はブレスレッドを翳して戦闘服に変形する。その俺の姿に一目瞭然としたカチナ達。

乱花「ああー…久しぶりだなあ…英雄として詠われた以来かしら？」

カチナ「ウソ…そのマークって…」

紫野「間違いないわ…あれは正しく…」

『炎刀を纏いし天才』だわ。」

・ 炎刀を纏いし天才。

乱花 「フフーン♪（ドヤア）」

カチナ 「あ、そうだ！シヨンは！」

乱花 「ああ、私の弟ならここに居るわよ？」

紫野 「え？」

シヨン 『変身時だけ一時的に乱花姉に移り変わるんだ。』

乱花 「さてと…あの小神望って奴を倒せばいいんでしょ？」

シヨン 『気をつけろ。アイツは…』

乱花 「みなまで言わないでよ。わかってるよ！」

乱花 は一氣に望に接近して戦闘に入るが…

望 「アツハハハハ！私の攻撃で手も足も出ないだろう！」

紫野 「ダメだわ…アイツの巨体な腕が邪魔をして…」

カチナ 「いえ、違うわ…」

紫野 「え？」

カチナ 「様子を見ているのよ。」



カチヤン（刀を鞘にしまう音）

乱花「一件落着！（ドヤア）」

俺は変身を解除した後にかチナと紫野に連行された。もちろん。一緒に出てきた姉ちゃんもだ。どうやらあれは何なのかという話だそうだ。

シヨン「コイツは…俺の姉ちゃんだよ。」

カチナ「シヨンのお姉さん!？」

シヨン「と言つても…皆とは歳は同じだよ…俺が後から生まれたんだ…驚異的なエネルギーを蓄えていたからな。」

紫野「驚異的なエネルギー?」

乱花「それは私が生まれた後の話だよ。シヨンは私と同じ病院で出産した。しかしシヨンが産まれてくる直前。彼には強大なエネルギーを宿している事に気づいた。そのエネルギーを魔法耐性と術耐性に優れた僕に移ったのさ。」

乱花姉が産まれてくる経緯を話す。

シヨン「そして俺が産まれたって訳よ。」

カチナ「んじゃ…今までのあの力は…」

乱花「全て魔法さ…でも私の場合は魔法のエネルギーも術技に入れちゃうけどね。」

紫野「魔法エネルギーを術自体に取り込むのはスゴかったわ。特にあの手で刀に火を



纏わせて倒す技……なんて奴なの……アナタは……

すると……

とちね「失礼する。」

カチナ「とちね。」

とちね「フイエの事だが……お前に謝罪したいそうさ。カチナのイジメも意図的な物では無かつたらしい。」

カチナ「んじや……イジメは小神望が作ったフェイクって事なの？」

とちね「そういう事になるな。赤紙シヨンと言ったな？」

破輪とちねは俺に話しかける。彼女が俺に言い出したのは……

とちね「今度。私と決闘をしてくれないか？」

乱花「お？」

とちね「君のお姉さんはスゴく強い……今度の決闘アリーナの日……エキシビションで戦おう。」

と言つて話していた個室を後にした彼女……破輪とちね……謎の多い刀女だ。

## ・ 風纏う刀女

シヨン「なあカチナ……」

カチナ「ん？どうしたのよシヨン。」

シヨン「あの破輪とちねって奴……」

紫野「ああ。あの時決闘をしていた？」

シヨン「アイツは誰なんだ？」

カチナ「見ての通り。このドラグーンレッドの最高ランク1位の實力を誇る風の刀士よ。ちなみに私は四位よ。」

乱花「ふーん……ドラグーンレッドのランキング1位か……」

紫野「所属場所の中ではランキングが分かれるの。確かシヨンさんのランキングは……」

緊張が走る……ランキングと言えば自分が入っているか緊張する瞬間だ。

紫野「あ……」

シヨン「ん？わかったのか？」

紫野「ええとそれが……」



カチナ「ごめん…私、アナタが操られているなんて…」

ファイエ「いえ、聖先生は実体に戻った後は教師失格になったらしくて…」

シヨン「んで？練習を手伝ってくれるのか？」

ファイエ「はい！この前のお返しをしたいので！」

そして放課後…

シヨン「うわなんだこのスピードオ!？」

ファイエ「とちねさんのスピードを特徴を活かしたマシンですわ。」

紫野「ラインズホース並ね…これは驚き。」

乱花「なるほど…スピードを活かした戦術かあ…ねえファイエ。これしばらく借りても

いいかしら？」

シヨン「え？どうしたんだよ急に…」

乱花「いやいや…いいこと思い出しちゃって♪」

そして決闘当日。アリーナには破輪とちねが立っていた。

とちね「特訓をしてきたみたいだな？その顔は…」

シヨン「お前もそうみたいだな？」

とちね「ふふ…さあ！始めようか！」

とちねは猛烈な台風を纏ってその姿を現す。その戦闘服は和服を意識し、両手両足が

刀のような形をした武装になっていた。

シヨン「いくぞ乱花。遅れるなよ！」

乱花「わかつてるよ！」

俺はブレスを起動して乱花が現れ、戦闘服の状態になる。

とちね「さすがは炎刀を纏う天才だ。だが私の速さに勝てるかな！」

とちねは猛スピードで俺に攻撃をするが、乱花も負けじととちねに対抗する。

乱花「(やっぱり…破輪とちねは風を利用した速度をあげる魔法を駆使している…けどもう一つ肝心なところがある…この感覚はなに？雷…いや、雷はカチナの得意分野…まさか！」

乱花は大きい攻撃を見つけたので素早く避けた。俺も何があつたかわからない状態で混乱していた…

シヨン「おい!?!いったい何が起きたんだよ!?!」

乱花「最初は目を疑ったけど…まさかアナタは光を使うことも出来るのね？」

とちね「察しがいいな…これは光刀式といい、風を光に変え、近接武器にする特殊な技だ。」

乱花「刀式は魔術の基本的な技つてこと…まさかここまで極めるなんてスゴいわ。」

とちね「さあ…続きを始めようか！」

乱花「ええ、上等よ！」

しかし俺は何かが来るのを気づいていた…この音はなんだ？馬の走る音に近い…

シヨン「あ!?! 乱花、とちね、正面だ。避ける！」

俺が声を上げた後に二人は急に起きた壁の崩壊を見てすぐに避けた。

シヨン「!?!」

乱花「ねえ、まさかあれって…」

とちね「ああ、間違いない。」

俺達の前に現れたのは馬の形をした化物だった。すると剣を持ってエネルギーをため出した。

とちね「まずい！」

乱花「ちい！」

私達は避けられない状態だったが…

ファイエ「コスムデyimエンコート！」

謎の球体型のドームが俺達を守ってくれた。

シヨン「これは…」

とちね「来てくれたか！」

紫野「二人とも大丈夫？」

カチナたち三人が俺達のところへ駆けつけた。

カチナ「あれはオーバーメガ!？」

紫野「お姉ちゃんの心配性で様子を見に来たけど…まさかこれがね…」

シヨン「オーバーメガ?」

ファイエ「禍物とは別に魔力を一定の値まで注ぐとああやって怪物になるんですの!」

とちね「あの形状だとおそらく馬…」

シヨン「…」

シヨン&とちね「上手いだけに!」

カチナ&紫野「今オヤジギャグを言っている場合じゃないでしょうが!」

乱花「もう! ささつといくよ!」

乱花はオーディメガに向けて走るが…

乱花「速い!?! こつちが圧されてる!?!」

シヨン「何か方法はないのか?」

乱花「一応あるけど…2分もすれば…」

ファイエ「乱花さん!」

ファイエが攻撃upの魔法を唱えて乱花の火力を上げるが、それでも相手は落ちようと

しない。

乱花「あと…1分…！持ちこたえろ！」

カチナ「まずいわ！このままじゃ乱花が！」

とちね「…」

するととちねが乱花に加戦する。

とちね「策があるんだろ？」

乱花「察しいいじゃない！」

乱花ととちねはオーディメガに向かつて攻撃をする。二人の息がピッタリ合う。

乱花「あと30秒で新しい力が完成する！」

カチナ&紫野&ファイエ「えええ!?!」

とちね「任せろ！」

とちねは乱花に続いてオーディメガに攻撃する。そして…

乱花「シヨン。体まだ持ちこたえられる？」

シヨン「いつでも！というか大丈夫なんだろうな？」

乱花「安心しなさい…！一気にくんだから！」

乱花は雷と紫色の風を纏って新しい姿になる。その姿はくの一を思わせる和装だった。髪も注連縄で結ばれており、ロングがポニーテールに変化をしている。

ファイエ「えええ!?!乱花さんって形態変化が可能なんですの!?!」



乱花「まあ…これは初めての試みだからね…ぶっつけ本番一気にいくよ！」

乱花は一気にオーディメガに向かって走り大剣でその大きな剣を切った。

乱花「その腕じゃ…私には勝てないよ！」

大剣に雷と風のエネルギーをチャージしてそのままオーディメガを真ん中で真つ二つに切った。オーディメガは消失し、 $\langle$ ヘスフィア粒子 $\rangle$ は散り散りになった。

カチナ「やった！倒した！」

紫野「ふう…一時期はどうなるかと思ったわ…」

とちね「ということ、これからよろしく頼む。」

シヨン「んで？次は？」

紫野「そうね…チームを作ってみるのは？」

シヨン「チーム？」

カチナ「私達の学園ではチームがあるの。最大10人まで。どの部。どんな人を誘っていいのよ？」

シヨン「ええと…確か今五人だから…あと五人か…」

紫野「あ、んじやラインズホースに行くのは？」

ファイエ「ええ!?!あの技術者の塊の!?!」

とちね「確かあそこは……」

乱花「ん?何か気まずい事があるの?」

とちね「気まずいっていうか……あそこにはラインズホース一位の生徒がいてな……その一位の生徒が……かなりヤバい奴で……」

のなの「赤紙シヨンと赤紙乱花ね…いい研究材料になりそう♪」

## ・ 霊々姉妹

シヨン「というわけなんだけれど……」

今俺は乱花と共にカチナ達に例のオーバーメガの調査結果を報告した。今回現れたオーデイメガは何者かに転送されたという説……

カチナ「なあーるほど……通りで何か気にくわないかと思つたわ……」

紫野「にしては変よ？普通ならあんな事……」

「……」

とちね「少し提案なんだが……ラインズホースに行くという手は？」

カチナ「そういうえば前にそういう事を言つてたわね？」

乱花「でも大丈夫なの？ラインズホースなんか言つて……」

とちね「安心したまえ……ラインズホースは技術魔法のスペシャリストさ。」

シヨン「技術魔法？」

カチナ「マシンや自然を使う魔法よ。武器を精製したりの技術もあるけど……」

とちね「問題はドラグーンレッドとの大差だ……こつちは属性を主に使うが……肝心な技術は……」

ファイエ「とりあえず今日は解散しましょう。」

シヨン「ああ。」

寮部屋に戻った俺は色々考えてみた…ラインズホースは技術専門…なら武装マシンとかを作っているのかな…

翌日。俺はカチナ、とちねと共にラインズホースに向かった。乱花は…

乱花『新しいフォーム考えたから一人でお願い！』

って言って来なかったし…紫野とファイエに関しては生徒会の用事で忙しいらしい…

とちね「ここがラインズホースか…キレイな場所だな。」

シヨン「初めてきたけどかなりいい場所だな。」

カチナ「そういえば二人は初めて来たのね…」

とちね「なに？カチナは行ったことがあるのか？」

カチナ「ちよつとした理由でね…」

???「そうそう…いつも私に分からないところを教えにくるのよね…」

俺達の前に現れたのはショートヘアの女の子だった。髪と目の色が水色でラインズホースにあつた制服を着ている。

シヨン「君は？」

のなの「私は霊々のなの。ラインズホース…一位…」

とちね「霊々のなのってあの氷を使う…」

のなの「待って！…「今日は11時から雨が降るんだっけ？おまけに雷も…」」

彼女が小声で天気の話をしたその時だった。

ドォーン！ザアアアアアアアアアアアアアアアアア！

とちね「うお!？」

シヨン「ええ…」

本当に雨と雷が降りやがった…

のなの「え…ええとごめんなさい…かなりの確率でこれが当たって…エへへへ…そろ

そろ案内するわ。ついてきて。」

カチナ「いくわよ二人とも。」

シヨン&とちね「？」

二人の関係を不思議に思いながらも、のなのに着いていく俺達。

のなの「ここは武装マシンを製作する場所よ。私達は魔法素材を使ってこういうマシンや武器を作っているの。」

とちね「ドラグーンレットのと違い…こちらはかなりスッキリしたデザインなんだな？」

のなの「んで、これがマシンを作るのに必要な魔法素材。」

シヨン「かなりしつかりしてるんだな…」

俺達が見学を楽しんでいる間に影から見て奴がいた。

???「あれがお姉ちゃんの言っていたお客さんかあ…今日は忙しくなるぞ〜！」

そして俺達はあるゲート前にやってきた。かなり厳重されている場所だが…

のなの「ちよつとここで待ってて。準備をしてくるから…カチナちゃん。ちよつと手伝ってくれる？」

カチナ「え？ちよつと！のなの！」

カチナを連れて行ったのなの…しかしここで俺達は推理モードに入る。

とちね「何か感じたことは？」

シヨン「霊々のなの誘いが妙に変だ…カチナはライズホースの内装や設備を知っているような感じをしていた。」

とちね「私も一つだけ…カチナくんの行動も怪しいのも確かだが…監視カメラが常時私達の方を向いていた…彼奴の目的は…」

シヨン「2対2の戦いをして俺と乱花、そしてとちねの実力を見ること…」

とちね「まんまと嵌められたな…」

シヨン「ああ…カチナの様子もおかしかったしまさかなとは思ったが…」

とちね「向かってみるか？」

シヨン「ああ。」

俺たちはこの先の橋を渡る。この橋……やけに長い気がするが……ま、いいか。そして10分後…

シヨン「おい…」

とちね「ああ…あれから10分も経っているのにまだ橋の道が続いている。」

シヨン「一体誰が……まさか！」

俺は急いで橋の辺りに何かないかを探す。すると赤いスイッチが現れて…

シヨン「!？」



とちね「アリーナ……まさか！」

シヨン「いや、そのまさかだよ。」

俺たちの前にのなのが現れる。

のなの「あらら……もうトリックを見破つたのね。」

シヨン「というよりかは……結構前からお前……いや、お前と誰かのトリックを見抜

いてたさ。」

とちね「ということはやはり、黒幕は……」

のなの「黒幕って言わないでよ……こう見えてもアナタ達のチームを見極めているのだから。」

のなの「はプレスレッドを起動して氷を彷彿させる戦闘服を着る。

のなの「さあ、始めましょう？」

シヨン「とちね、時間を稼いでくれるか？」

とちね「そう言うと思つたよ！」

とちねは戦闘服を纏つてのなのと戦う。しかし……ドラゴンレッドの1位とライ  
ンズホースの1位の戦いは見ものだな……

シヨン「乱花、聞こえるか？」

乱花「ごめん。まだ忙し……」

シヨン 「何が？」

乱花 「新しいフォームの最終調整！あと1分待つて！」

シヨン 「全く……しかし……」

何かに見られている気がする。一体……

乱花 「お待たせ！かなりピンチらしいわね？」

シヨン 「ああ、頼む！」

俺は乱花にバトンタッチをしてのなのに挑む。しかしのなのは氷を使って俺たちを苦しめる。

シヨン 「おい！これ炎じゃどうにか出来ないんじゃないか!？」

のなの 「私の氷は誰にも溶かせない！」

??? 「そして僕の武装マシンには敵わない！」

「!？」

俺達ととちねの前に現れたのはのなのとそっくりというか。姉妹っぽい……

とちね 「まさか……霊々てんね？」

シヨン 「誰？」

乱花 「紫野から聞いたことがある……ラインズホース1位の妹がラインズホース3位で総合2位の實力だつて……」

シヨン「マジかよww!？」

乱花「シヨン、新しいフォームでいくわよ！とちね、目を閉じて！」

乱花は砂嵐を発生させて辺りを曇らせる。

のなの「あれは…」

全体的にオレンジに染まり、女性が着る鎧っぽい戦闘服を纏い、両腕には爪のような武装を着けていた。

乱花「気をつけなさい。これから砂鉄の嵐が吹くわ。」

乱花はまず。上にいるてんねを攻撃した後にのなのを攻撃する。

乱花「全くカチナに迷惑かけて！少しは反省しなさいアホ！」

乱花は一呼吸置いて両腕の爪にエネルギーを纏い…

乱花「グラビティクローパージ！」

地面に爪を刺して下から砂嵐を発生させて2人を巻き込ませて気絶させた。

とちね「砂鉄を上手く使った新フォームか…君の才能には驚かされるよ。乱花。」

乱花「ま、こんなもんだからね。」

シヨン「……」

とちね「……」

次の日、俺たちはなんで無言なのかと言うと……

紫野「ということで、今日から霊々姉妹の2人が入るからみんなよろしくね！」

カチナ「よし！これで更に強くなったわ！」

ファイエ「さあ！これでどんどん禍物とオーバーメガを倒しますわよ！」

のなの「よろしくねみんな！」

てんね「んじゃ僕は新しいマシンでも、開発しよ！」



シヨン&とちね「こんちくしょう――――！！？」

・ 謎の吸収鬼と銃の使い手      ペルーシヤとミナミ

シヨン「う……うーん……」

乱花「どうしたの？ スゴい不機嫌そうな感じがするけど…」

シヨン「いや……のなのとてんねを仲間にして数週間経った後に何故か肩こりが激しくて……」

カチナ「ここ最近連戦続きだもんねえ…誰かさんのおかげで？」

乱花「うう……悪かったわね……」

シヨン「と、とりあえず少し何か……」

ドカーン！

俺が何かを話そうと始めると謎の爆発が起きる。俺たちは急いで爆発のあった場所に向かうと……

のなの&紫野「(・ω・) チーン」

ファイエ「(?!?)」

シヨン&カチナ&乱花「(?!?)」

とちね「おい！今の爆発はなん……え？(・皿・)」

俺たちの目の前の光景にはのなの、紫野、フィエが沈黙し、その後ろでてんねが……  
てんね「い、いやあく……失敗しちゃった。」

カチナ&乱花「なにこれ。」

シヨン&とちね「さあ？」

事情を聞くとどうやら新マシンの開発をしていたらしく、その重要なエネルギーの製作に紫野とフィエを誘った結果。2人は連日霊々姉妹の実験に巻き込まれ、小さい爆発で巻き込まれたが……ついに大きい爆発をしてしまったという事態に……

シヨン「全く……なんで？何を開発してるんだ？」

紫野「そ、それが私達もまだ聞かされていなくて……」

フィエ「う……うん……」

乱花「ありやりや……目に隈が出来てるよ……」

てんね「でも、乱花ちゃん専用のマシンは完成したよ？」

すると向こうのピットのような場所の丸いところからバイクが現れる。

乱花「すごい……この子、かなりの轟音を秘めているよ！」

のなの「それは反動力型バイク。ルドレイヴィーよ。」

乱花「反動力か。」

シヨン「試してみるか？」



乱花「……」

シヨン「どうした？」

乱花「シヨン、変身するよ。」

シヨン「お、おう。」

俺は乱花の指示で変身をした。

カチナ「乱花？何かあったの？」

乱花「見られてるのよ。」

「え？」

のなの「誰が？」

乱花「シヨンよ。前からおかしいと思ってたんだよ。シヨンの部屋の周辺には血はあ  
るし。シヨンが下着のまま寝てる時に見えた肩の傷……これ、もしかしたらバンパイアの  
仕業だと思うわね。のなの、てんね。そっちのほうでバンパイアの生徒はいるかしら？  
……人知を超えたね？」

のなの「じ……人知を超えたって……」

てんね「お姉ちゃん。もしかして……」

のなの「あ！ペルーシャちゃん!？」

シヨン『ペルーシャ？』

乱花「やつぱりね……僕も予想はしてはいたけど、ラインズホースの2位の子が手を出す……いいや、シヨンを見極めるって方が正しいかな？」

シヨン「ペルーシャって何者なんだ？」

??「ラインズホース2位、ラインズホースの悪魔と呼ばれている吸血鬼の女……」  
カチナ「アナタは？」

のなの「深恋ミナミちゃん。ペルーシャちゃんの幼なじみで、普段は彼女を見守りながらラインズホースの周辺を警備している子なの。」

ミナミ「忠告しとく、今のペルーシャは誰にも止められない。それでもアイツと戦うの？ 炎刀を纏いし天才。」

乱花「僕が策がない状態で行くと思ってるでも？」

シヨン『おいおいまさかまた新しいフォームを作ったんじやあるまいよな？』

乱花「お？んじやペルーシャとの戦いが終わったらトレーニングメニューでも作ろうかい？」

シヨン『お断りします……』

乱花「さて、いくよ。ルドレイヴィー！」

乱花はルドレイヴィーに乗ってペルーシャのいる場所へ向かう。

乱花 side

乱花「ここが例の彼女がいる場所か……もう入った瞬間から彼女の気を感じる……流石はバンパイアだ……ん？」

トントントン。

乱花「おやおや……」

??? 「あの男に期待してたけどまさかアナタだったとはね……」

乱花「君がペルーシャ・ミナゲルデか。」

ペルーシャ「はぁーい♪はじめましてかしら？」

乱花「ふふ、かなりお気楽のようで何よりだね……余裕があるみたいだっ！」

ペルーシャ「くっ！」

僕はペルーシャに攻撃をするが、彼女のスピードは想像がつかないものだった。

乱花「なるほど……大きい鎌を負担なく持てる魔法『大差』と、速度を上げる『存速』を使っているか……」

ペルーシャ「どうかしら？私の腕前は？」

ペルーシャは鎌をもちながら僕を挑発する。しかし僕は余裕の表情を見せて……

乱花「さて、夜遊びはもうおしまいにしよう。姉妹だけに。」

一方……

とちね「ぶっ！ぶっはっはっは！お、おしまいにw w wお！姉妹！アツハッ

ハツハツハツｗｗｗｗｗｗ

のなの「な、なんで笑ってるの？」

紫野「とちねちやん。刀とかの腕前はすごいけど……笑いのツボは弱いんだよ。」

そんな事も知らない僕はペルーシャとの決着を着ける。音速を超えた先の掴み取る神速を……

乱花「テイクオフ。」

僕は銀色のシルバーとグレーで備わった戦闘服を装着する。内部機構が露出し、出力の上昇に合わせてシルバースフィアを最大限に引き出す。

ペルーシャ「あらあら……大きいじゃない……」

乱花「どこを見てるんだこの変態があー！」

僕は最大スピードでペルーシャのスカートを広げ、パンチラさせた後にキックで吹っ飛ばしそのまま……

乱花「シルバディング・ヴァースティング！」

銀色で円錐状のスフィアを展開してその中に突っ込んで決めた。

乱花「よしやった！……え!？」

ペルーシャ「いやん。アナタって変態なのかしら？」

乱花「ま、まさかこれって……（緊急脱出用に使う禁断の技……全裸脱出《ネイキッド

エスケープ≫……」

な、なんでこんな変態な技しか使わないんだ彼女……

ペルーシャ「いやー♪まさかここまでやられるとは、完敗だわく♪んじや、帰って血でも飲んで乾杯しますか♪」

そしてそのようにまたとちねが……

とちね「アツハツハツハツハツwwwwwwww完敗で乾杯wwwwww」  
「ダメだこりや。」

そして次の日、ペルーシャとミナミが僕たちのチーム。ファーストドレスに入隊する事になった。まさかこうなるとは思ってもいなかった……当分ペルーシャがシヨンにくつつく時は僕が見張つてよう……って言つても……

シヨン「アツーーーーー!?」

ペルーシャ「ご馳走様♪」

乱花「これじゃ、見張るどころか……僕がツツコミに回りそうだよ……」

しかし、僕はこの時知らなかった。謎の脅威と神のような存在が同時に地球に現れる事を……ま、これはまた別の話になりそうだけどね。

## ・ 完成する分離型特攻車両

「分離型特攻車両？」

アルディア「うん。その名もヴァストパンツァー。簡単に言えば、真ん中の大きい車タイプの車体に、分離できるバイクが備わってるって思えばいい。これを使えば巨大な奴を追ったりも可能だ。」

シヨン「おお！スゲエ！」

のなの「しかももう完成もしてるのよ？すごいでしょ？」

カチナ「すごいじゃないアルディア！」

アルディア「ま、造るのには3ヶ月はかかったけどね。」

てんね「僕も手伝ったんだよ！」

乱花『（こりや……アタシの荷が更に重くなりそうだ……）』

すると俺の端末から連絡がきた。どうやら愛娘先生が話したい事があるらしい。ブリーフィングルームに来た俺達は早速、その話を聞くことになる。

愛娘「実はサイ型のオーバーメカが暴れているのよ。」

のなの「となると、結構重量級かしら……」

シヨン「サイのスピードを舐めちやダメだぜ？デカブツに見えて、結構速いからな。」  
カチナ「どうする？あれ、そのウチ何かやらかしそうで怖いわ。」

愛娘「いいえ、もうやらかしてるわ。既に数件の銀行を荒らし回ってるわ。」

ファイエ「銀行強盗のオーバーマガなんて初めて聞きましたわ…」

愛娘「映像もあるわ。」

すると、サイ型のオーバーマガが銀行に突っ込み、吸引用のパイプを取り出し、それを金庫にさして吸収するという恐ろしい映像だった。

愛娘「警察の攻撃も、装備している武装で次々と押し退けていったわ…このままだと、取り返しのつかないことになるわ。」

アルディア「ヴァストパンツァーを使おう。実戦にはいいタイミングだ。」

愛娘「完成したのね。んじや誰が行くかしら？」

アルディア「それは勿論、君だよ？」

シヨン「え？俺？」

アルディア「簡潔に言えば君の中のお姉さんかな？」

シヨン「お、おう…」

アルディア「んで、残りはカチナ、のなの、てんねで行って。のなのは真ん中の操縦、てんねは後ろのガトリング席に…2人は備え付けのバイクに乗って。」

てんね「よし！ いっちょ始めますか！」

そして1時間後…

乱花 side

ライノメガ『グオオオオオオオン！』

新宿の街中を暴走する鉄のサイ、ライノメガはある場所に向かっていた。それを追うかのように……

のなの「おらあおらあ！ のなの様のお通りだ！ そこ退け一般人！」

乱花「の、のなのってあんな性格だったけ？ アタシの知ってるのなのじゃないわ…」  
てんね「お姉ちゃん… こういうのに乗ると性格が一変しちゃって…」

のなの「いやっふおーおー（（o（\*。▽。\*）o））」

カチナ「うわうわうわ!? 運転が荒いわよ!? それにスピードも速いわ!?」

アルディア『ヴァストパンツァーの基本速度は60だぞく?』

乱花「最高は!?!」

アルディア『100。場合によっては1000。』

「『1000!?!』」

乱花「化物お…」

するとライノメガの身体が急変し出す。なんと身体から二体の虎を召喚してきた。



しかもその虎は貯蔵していた金を金庫らしい武装に入れている。

のなの「ああ!? おい泥棒猫! 早くその金を銀行に返せやゴラア!」

てんね「ああヤバいやバいやバ! 極道ヤンキーまっしぐらだよ! 僕が分離するしかないねっ!」

シヨン『そつちでも分離できたの!?!』

てんねがヴァストパンツァーに装着されたルドレイヴィーを分離させる。アタシとカチナ、のなのとてんねで手分けして追いかける事になった。

カチナ「おお! ルドレイヴィー初めて乗ったけど、これいいわね! 最高!」

乱花「あんまり調子に乗っていると反動力のコントロール出来なくなるよっ!」

シヨン『それ姉さんが上手いから言えるんでしょうが…』

乱花「うるさい!」

乱花がマシンガンを取り出して、目の前にいるタイガーマガに銃弾を放つ。

乱花「よし! 少しダメージは与えた!」

そしてタイガーマガに近づいて…

乱花「取った! アイツの背中に付いてた金庫だ!」

そして私は剣を取り出して、既に逃げようとしているタイガーマガを…

乱花「おらあ! アナタを今日の晩飯にしてあげる!」

と言つてタイガーマガを削ぎ落としていった。一方のカチナも、タイガーマガから金庫を奪い…

カチナ「アナタはこれでおしまい！」

カチナの放つた電撃砲で爆発四散した。一方ライノメガを追つた零々姉妹は…  
のなの「マズイわ！このままだと逃げられちゃう！」

てんね「(二元に戻つてよかった…) 逃がさないよっ！」

てんねがガトリング砲でライノメガを攻撃するが、あまりの硬さに追うことしか出来なくなつてしまう。

てんね「マズイ！このままじゃ！」

乱花「なら、アタシに任せて！」

私はルドレイヴィーのスピードを上げて、ある形に変える。

カチナ「え？」

のなの「何？」

てんね「お！新しい姿かな！」

そう、その通りである。アタシはバイクを変わった形に変形させ、白い衣装へと姿を変える。これこそ、以前ペルーシャの時に使ったシルバーネストグレイファイとは別のスピードタイプの姿である。紫色の服を着ており、尚且つルドレイヴィーを武装した姿

になっていた。

アルディア「ふふ……あの時ルドレイヴィーを改造してよかったよ……」

そしてその笑みの先に、乱花は……

乱花「もつとあげるわよ！」

乱花はスピードを上げてライノメガにくっ付く。そして……

乱花「逃がさないわよっ！この！」

タイヤのような武装をライノメガに当て、タイヤを回した後に転ばせた後、私が上に飛び上がり……

乱花「さあ、これでフィニッシュよ！」

ライノメガの頭に飛び上がり、一撃で痛々しい程のキックを命中させた。

ライノ『l 6 7 g p y m p d p w p g p o p a p p また4 6 6 7はたはまさたまら  
 ^ : # ^ ^ [ ^ : # ^ [ ^ : : ! ? ( , y i y v z h ! ? ! y i y ]』

ライノメガはノイズを発しながらその場で機能停止をした。

乱花「ライノメガ、機能停止……ちよつとやり過ぎたかな？」

カチナ「先生、金庫は無事です。」

愛娘『ありがとう。回収するまで待機してて。』

「了解！」

のなの「変ね……オーバーメガが…何のためにお金を集めているのか…」

てんね「もしかしたら、人工のオーバーメガかも。」

シヨン「人工?」

カチナ「オーバーメガにも、自然で作られたものと、人間が作った物があるのよ。それも良しも悪しも、どちらかは区別が出来なくなってるわ。」

シヨン「恐ろしい事だな…」

乱花「(あの時…ライノメガは何かのノイズを発していた…もしかしたら他のライノメガが…)」

そしてこの後…アタシ達がこのライノメガを追った後に別のライノメガが金を盗み去って行ったことは誰も知らない。

# ・金の行く先は魔法!?

のなの「行先が港ですって!？」

とちね「ああ……どうやら我々が知らないところでこの金を別の場所で盗んだ奴がいた。」

シヨン「クソっ!あれは囷だったか!」

カチナ「どうするの?」

のなの「とりあえずその港に向かう。でも全員は無理ね?」

シヨン「取引が行われる時間は?」

紫野「夜だわ。しかも恐ろしい取引みたいね?」

シヨン「俺とカチナ、のなの、ペルーシヤで行こう。」

乱花「おっと、シヨンには私が必要でしょ?」

シヨン「ああ……そうだったな。」

俺達はあまり目立たない為に夜間任務用のバイクで出撃する準備をしていた。する

と…

ペルーシヤ「ねえシヨン？アナタは好きな人はいるの？」

シヨン「え？好きな人？」

ペルーシヤ「例えば：カチナが好きだったり？」

シヨン「んなアホな事を言うなよ。」

カチナ「むう……」

ペルーシヤ「ほら？カチナが照れてるじゃない？」

のなの「アツハハハ……^^;」

こうしてその港に向かった俺達はその恐ろしい取引現場を目撃する。

のなの「嘘……あれスフィア粒子よ？何処へ持つてくのかしら？」

シヨン『もしスフィア粒子なら、悪用に使われる事が考えられる。』

乱花「挟み撃ちにしましょう。私はペルーシヤとこつち側、カチナとのなのはそのつちから。」

カチナ「分かった。」

のなの「了解。」

ペルーシヤ「オーライ。」

そして乱花は取引を守っている犯罪者達をペルーシヤと一緒に次々と撃墜していく。

カチナとのなのも向こうで次々と犯罪者を追い詰めた。そしてついに……

カチナ「動かないで！エルノーヴァ警備よ！」

取引相手「クソツ！エルノーヴァの学生の連中か！」

犯罪者「おい！どうにかし……」

ペルーシャ「おやあ？犯罪集団にしては若い奴が多いね？」

犯罪者「ひ……ひい!？」

ペルーシャ「アナタの血……結構熟成されてるわね？」

のなの「ペルーシャ……」

ペルーシャ「まずどこから頂こうかしら？指から？それとも肩の方がいいかしら？」

シヨン『（ハ、ハ）ハア……』

カチナ「ちよっ！早く止めな……」

乱花「止めといた方がいいよカチナ。もうスイッチ入っちゃってる。」

カチナ「うそお……」

犯罪者「よせ！理由はちゃんと言う！スファイア粒子も返す！」

ペルーシャ「ほおう……一体誰がスファイア粒子を盗めと命令したのかしら？」

犯罪者「犯罪集団《メガグルス》：アイツらからスファイア粒子を盗めと言われた！」

ペルーシャ「言われたのはそれだけ？」

犯罪者「あ、ああ！それしか言っただけだ！」

ペルーシヤ「取引相手さーん? 後で《o h a n a s i》しようか? (\*^~\*)  
取引相手「ひいひい!」

ペルーシヤ「んじや、犯罪者さんバイバイ!」

ペルーシヤは俺達の忠告を振り切り、犯罪者の肩から血を吸ってしまった。その強さに犯罪者は倒れてしまった:

バタン……

のなの「メガグルス:ソイツ等がスファイア粒子を?」

シヨン「嫌な予感がする:まずは取引相手のソイツを連行しないと。気になることも大ありだからな。」

俺達は取引相手だった奴を連行。そのままエルノーヴァに戻るのであった。あ、スファイア粒子はちゃんと持ち主に返しましたよ(\*^~\*)